

昭和二十四年四月十五日第3行種郵便物認可

(通第二〇三号)

次 目

寂 静 と 応 現	(一)	近 角 常 観	(1)
法 藏 の 四 十 八 愿	(一)	花 田 正 夫	(11)
一 道 会 の 記	(三)	榊 原 德 草	(17)
弘 誓 の 強 縁	松 村 繁 雄	(23)

慈 光

第十八卷

第四号

寂 静 と 応 現

近 角 常 観

一 混槃寂靜の眞実証

七月（大正八年）には六日より十三日まで夏季求道会を開き、今年は『教行信証』の証卷を講本として親鸞聖人が示された我々がこの人生を終りて涅槃のさとりに入らせて貰う、その証のことを話させて貰うたことであった。こは仏教としての、いよいよの最後の、理想がこの涅槃なることになるのである。寂靜はその涅槃の境界に入った有様が即ち寂靜である。『正信偈』には

速に寂靜無為の樂に入ることは、必ず信心を以て能入とすといえり。

即ち我々がいよくこの生を終り、あらゆる煩惱も無くなりて、広大なる仏の真実証のさとりの境界に往かせて貰う、その界のことである。

我々の日常生活は、是非善惡、幸不幸、喜び悲しみの何処までも火宅無常の迷いの世界であるが、斯くこの界が迷いに迷いを重ねて、果てしなき人生なることを

而して今ここに、かくこれを持出して話したは、実は今夏求道会八日間に聞いて頂いたそのことが、この夏に於いては、私一身上の事実となつて現われ、恰も会にて講本で頂いたそのことを、現在只今にては、現前の事実として知らせて貰うてているから、そのことを聞いて頂こうがためなのである。

二 愛兒の夭折

それは御承知下さる方もある如く、

私の末子、常聰——恰も昨日生れたのが、求道会が終ると間もなく病氣になり、夏中種々の手当てを尽くしたのであつたけれども、終にこの八月二十六日を以て亡くなつたのであった。そのため今夏は一旦は伝導に出かけ、大阪、岡山に立寄り、四国高松では五日間話し、それから丸亀を経て、九州別府に渡つたところで急電に接し、そのまま引きかえして来たようである——。こは個人上の事を聞いて頂くもどうかと思ひますけれども、私今夏は、今云もほとんど一家話し合うだけの暇もなく、一寸抱いてやるだけの暇もなく立つてしまつたようなことであつたが、私の出立後間もなく病氣になり、一旦は脳膜炎の疑いがあ

あわれみ給いて、この煩惱苦惱の者をば何處までも見捨てさせられぬ仏の御真実なことが頂ければその一念から広大なる恵みに救われて、自己の計らい心の必要が無くなり此の世ながら攝取不捨の光明中の生活をさせていただく。それが他力のかなめであることはもとよりであるが、しかしこの肉体の存し、業報の生きて居る限りは、いまだ眞実の証とはならぬ。いよく肉体が滅びて、眞の仏の証に入らせて貰うた、その時が眞実証と、このことを詳しく述べて貰うたのであつた。しかしてひとたびこの眞実の証りの境界に目醒めさせられて見れば、このたびは、この人生に夢みて居る我々の境界——無明の酒、三毒の毒に酔いしれて居る有様が哀れむ可き故、この度は、その境界より再び人生に姿を現じ、迷える我々に種々なる方便、手引をして下さることになると、このことを今年度の講本『証卷』中には、丁寧にお知らせ下されてあつたのであつた。

つた。恰も別府で七月二十七日の晩、これより話そうとして居るそこへ電報が届いて、私は見るなり一席話して『かねてより言うて居る人生無常の有様、今この電報が来たので、も分る。この生れ、死にする生死の苦境を哀れみ、何處までもお見捨て無き御真実、これに夜が明ければ、このお慈悲に随つて、終に寂靜無為の樂にまで入らせて貰うのが有難い』

かく話してそのまま立つてしまつたのであつた。その時は脳膜炎というの故

『今夜あたりは死んで居るであろう。幸に存命していくても、再び間に合う人間にはなり得まい』

かく考へつつ非常の速力で帰つて來たのであつたが、途中汽車中にて神戸、浜松にて電報を受取り、次第に余り心配いらぬと聞いて凡情に歸り、喜んでは帰つて來たものの、覺悟を決めていた間が長かったので、そんな氣持で帰つて來た。

早速病院に行くと思つたよりは脳膜炎の症状らしきが和いであつたのと、且つ病氣は腎孟膀胱炎とのことで、單純なものなら希望があるときいて喜んでいた。すると三十日三十一日になつて非常の發熱で、四十度五分までになり、しかし単なる腎孟炎のことなりし故、重きにかかわらず安心していた。幸に一日以後は次第に熱も下り快方に運ん

で来たので喜んで居ったのであつたが、併しそれにもかかわらず如何にも元気が無く、何処か中心しつかりして来ぬという状態があつて、且つ嘔氣、食欲不振等、様々の現象を起し、どうもはつきりしなかつたようである。しかし医師の方では、もうここまでになり、且つ急に快くなる病気でないから帰つて静養することにしたら、とのことで二十一日に退院し、連れて帰つて来たら子供は非常に喜んだ。がその夜少しく激しい嘔氣を起し、それから翌日、翌々日とどうもよくなかったようである。して二十六日夜九時五分、終に亡くなつたようのことであつた。

即ち私としてはかくの如き出来事があつて、今日はすでに二七日遅夜となり、あとより考えれば万事が夏中に片づいて、又かく皆様とお目にかかるようになつたわけである。即ち今夏『証卷』を講本として話させて貰うた事柄をば今度はかくの如き出来事で、事実の上で知らして頂くことになり、通じて考えれば、夏季求道会の講義からが、かくの如き因縁があつて、かくの如き出来事で寂靜無為の味わいを知らして頂こうがため、その準備、手引きとして話させて貰うて居つたかの如く思ふして貰う次第である。

こはしかし私自身のことであるが、皆様の中には同じく

慈悲に聖道淨土のかわりめあり。聖道の慈悲とは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれどもおもうがごとくたすけとぐることきわめてありがたし。この文にしみ／＼感じたことであつた。如何にも人力をもつて助けんとするも、思う如くに助け遂ぐることは有り難い、如何にも思うよにならぬ世の中である。然るにこの世の中を、仏力で、思う如く人にも慈悲出来るかの如くに思うたが、現にかく力尽くして何にもならぬとすると「思うが如く助けとぐること有りがたし」はこれである。如何にも思う如くには一分一厘も助けられぬ、小慈小悲も無き身であることを知らして貰うたことであつた。それがいよいよ命終えられた時、仏の淨土に迎えとられて往生させて貰われるさまをはるかに此方から見せて貰つたと感じた時、

「親鸞聖人が『教行信証』の中に、眞實証を言われるは、正にここである。如何に慈悲を喜ぼうが、光明中に包まれて居ようが、この世にある間は思うよにならぬ。然るにそのして見よう無きを何處までもお見捨てのないお慈悲に攝取されて、かく往生させて貰われたとは」と。それは十数年前のことであるが、その後色々考へると直ぐその翌年の暮には私の長女、生後六十日ばかりの者で

求道会に出ていて、この種の御縁に遇われた方もあるうし又出無くて遇われた方もあろう。いずれにしても聖人のお示し下さる眞實証の御教化が如何にも有難いと思わして貰うのである。

三 父の示寂によりて示された眞實証の靈境

それには『慈光錄』にある（二百号記載）が、十数年前父の示寂によつて、眞實証の靈境を教えられたと感じたことがあつた。今朝も『慈光錄』でそれを見て非常に喜んだと或方の話であつたが、それは私は、人生もろ／＼の苦惱に苦しんで、如何にもこの仕方がないのを哀れみお見捨て無き慈悲と知らされて、その一念に恵みの中に摂取され、この世ながら慈悲のふところに入った経験をしたこと故、かつて、

私の頂いた時の思いは、あえて極楽を頼みにせぬではなかつたけれども、あえて未来を待たず、現在においてお慈悲の中の生活と喜んだことであつた。

が、いよいよ親が病氣となり、何とかして助けたいものである——恩を受けた親の死に目に急電に接してとんで帰り、侍すること三日、力尽きて何とももう仕ようがない。その時に『歎異鈔』の第四章

あつたが、それが亡くなつた時には、幼児であつたにかかわらず、私は非常に悲しんだ。いよいよ棺に納めて聖人の『和讃』を拝読し、

弥陀觀音大勢至 大願のふねに乗じてぞ

生死の海に浮かみつつ 有情をよぼうてのせたまう
如何にもかくの如き生死の海に姿を現じ、
無常の様を示して、親を済度してくれたと、その思いが胸にしみこんだことであつた。その感しはその後多くの子を失われた方に話して、喜んで下されたこと数を知らぬ。ところが今度はその後十数年を隔てて再び子供を失い、且つ永年『教行信証』を話して今年あたかも『証卷』に至つた時又々そのことを知らして貰つたというわけである。

四 第一に心に釘打たれたことは

そこで今度知らされたことは沢山あるが、先ず第一、心に釘打たれたこと、又聞いて頂こうと思うことは、平日より話することで、如何なる場合にもこれを言わぬことがある。それは我々人間の力で「こうも、あゝも」と所謂親の子を思う情の上より、又分別し思慮する上より、種々様々に心を用いることであるけれども、結局人間の力では思うよう一分も一厘もならぬという、これである。こはかねて私としては百も二百も承知のことで、

殊にこのたびは急の発病であったにかかわらず、遠方に居て電報で知り、急に帰京して一ヶ月も介抱が出来たのであるから、人生として不足いうべきでなく充分手は尽くされてゐるわけである。人生として手を尽くすだけは出来たのであるから、それで満足することが出来るかと考えてみるとそれが残らず空しくなつたのだから、満足することは出来ぬ。すると結局最後に何を氣付かしめられたかというに、人間の愚痴としては「こうもあつたら、あゝもあつたら」と思うことであるけれども、人間の力としては思うようになるものではない。

成る可きようになるわけである。しかも、そのわけは、然か成り行く可きようには、一分一厘まで前の世から決つていて、ある。我々の業報で、あれはあゝなる可きわけ、それ、のは、そういうかね、わけと、仏のお手許では初めからチャンと決つて居るのであるといふ、ここが聞いて頂きたい点である。これはありよう言うと、色々手を尽くしていくなくなつ後に悟つたのではない。既に九州で電報受取つた時には、さき言ふ如く、これより講壇に登ろうとする、その時、第一の脳膜炎との電報を受取つたのであつたが、そのまま手にして演壇に登り、

「諸行は無常なり、是れ生滅の法なり。……とは現にかく言ふてゐる私が、この電報を受取つてゐる。人生當て

ども、なつて來なかつたところで問題は起つて居るのである——こは余り自分のこと言い過ぎる嫌いがあるけれども、同じ境遇の方に聞いて頂くために、も少し言わせて貰いたい。

ことに私は愚痴な人間である。あゝこう考えることは、いつまでも止まぬ。それは思ふるも、又思ふるのもつともであるが、振り返り見ると、如何に思われ、考えられようが、人間の力では思ふように行き得なかつた、といふことが肝腎の点である。ここに著しく氣をつけぬと、何程お慈悲々々と言うて居らうが、身に浸みこまぬ。それが思ふようになる程ならば、釈尊が生老病死を哀れむ仏教をお説き下さることは無かつたのである。

そこで、そこが思ふようにならず、どうにもなり得ないその様を、解脱の本覚明了の境界より御覧下さると、そのため色々の苦惱を重ね、愛着が止まらないで苦しんで居る

その様をば哀れみ思召し下され、ここに広大なる大慈大悲をもつて、その者をば何處々までも捨てぬといふ眞実が現われて下されたが、お慈悲といふことなのである。

六 生きようと死のうと仏の御計らい

そこで第一の電報を受取るなり、

直ぐ私の頭に来たのは、

「ああ、あの子も今まで育ち、ことに非常に丈夫によく太つて、多くの人々に愛され、なつきして來たが、この電報では帰るまで生きているかどうか分からぬ。幸にこれが直つて御縁あつて法の為に働くようの身になるか。又短き生命を現じて有縁の者にちぎりを結び、親を助けてくれるようになるか、それは凡夫のはからうことである。それは

「ああ、あの子も今まで育ち、ことに非常に丈夫によく太つて、多くの人々に愛され、なつきして來たが、この電報では帰るまで生きているかどうか分からぬ。幸にこれが直つて御縁あつて法の為に働くようの身になるか。又短き生命を現じて有縁の者にちぎりを結び、親を助けてくれるようになるか、それは凡夫のはからうことである。それは

「ああ、あの子も今まで育ち、ことに非常に丈夫によく太つて、多くの人々に愛され、なつきして來たが、この電報では帰るまで生きているかどうか分からぬ。幸にこれが直つて御縁あつて法の為に働くようの身になるか。又短き生命を現じて有縁の者にちぎりを結び、親を助けてくれるようになるか、それは凡夫のはからうことである。それは

五 子供を失われた方に

「ああ、時こうもあつたら、あゝも出来たら」と、私は、思ひます。しかし「そうなるとよかつた」は結局あとより言ひます。

うことで、それがその時は、もうなり得なかつたが事実である。それは思ふように出来得る人間に力があるなら何とでも言われようなれども、そもそも不完全なる人間、思ふさまならぬ世界。故にどこまでも「一分一厘思ふようにはならぬのだ」という、ここが迷いの世界として氣をつけて来なくてはならぬ眼目の点なのである。

ここはこの度は私は種々に考える。現に私として悲哀は何處にあるか。しかし失うた者自身としては「あれがあの時あゝなつて居ればよかつたかも知れぬ、あゝこう」などそれがそなつて居れば事はなかつたのであるけれども、私はこの度は私は種々に考える。現に私として悲哀は何處にあるか。

なるのである。それは私のこの度の場合の如き、自分の子供として愛情の上よりやらずには居られぬ。しかし最後の覚悟が先にきまつて、その上から出来得る限りの人力を尽すというわけである。私はその覚悟の上から、若し一瞬間のこととで最後に間に合わぬというようのことがあるかも知れぬとの考えより、あらん限りの早く帰れる方法を取つて帰つて来た。しかし帰ることも出来ぬものなら、帰れぬことがあるかも知れぬのである。帰つて見ると一旦はそれ程心配であったのが一時病怠り、一ヵ月近くの看護することが出来たというわけであった。

七 「病」「老」の問題

あとより考えて見ると、その看護中も子供より幾多の教訓を受けて居ることを発見する病苦中からもその苦を忍んで耐えて居た様子、その苦の中からも玩具を楽しんでいじつて居た様子、親しき者に遇つては懐かしみ、喜んだ様子、万事万端、頑是なき幼児のしたことであるも、親に取つては一々教訓を遺していくくれたと考えることである。

いよ／＼最後になつて、快くなるか／＼と待つて居たのが反対に出で、かねて頂いて居る『歎異鈔』の第九章久遠劫より今まで流转せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養の淨土はこいしからずそうろうこと

められた。家の如きはそれを著しく感じて居るわけである。母の痡せ衰えた様見では、子供の痡せた有様を考え、かえつて子供の病に導かれ、親の老、病の苦しさを察せらるるようせしめられたといふ次第である。これでなければ、生老病死の病老が意味をなさぬ。故に「死」の問題にのみ業報、因縁を語るべきに非ず「病」の上でも語らねばならぬとなるのである。ことにこのたび子供の病気が如何にも快くなり得ないようになって居た。その段はほとんど遺憾なしに、快くなれるものでなかつたことを感じ「こうも、あゝも」とは思ひぬで無けれども、そういう思いを起し得無い程にあるのである。

八 我が半身が往生させて貰つた思い

さてその「病」がいよ／＼のりて「名残り惜しく思えども婆婆の縁つきて、力無くして終る時、彼の土へは参る可きなり」——私も実地になればどうなるか分らぬも、懺悔すれば今まで人様に話しながらも、心の中に、一つ淋しい処があつた。それは多くの病気の方にお慈悲を話して

「快くなろう／＼と思うても、なれぬのが暗である。その暗なること、名残り惜しく思えども娑婆の縁つきると往かねばならぬことを哀れみ思召し下されて、その者を捨てぬとの御眞実は、その者が力無くして終る時、彼土

まことによく／＼煩惱の興盛にそぞろうにこそ。名残り惜しくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときかの土へはまいるべきなり。……勿論子供のこと故、信心が何やらわからぬ。が如何にも生理的に次第に体力の尽きると共に「名残り惜しく思えども……力無くして終る時云々」の有様を現して見せてくれたわけであつた。

なおここで一言するに、今まで生死問題々々々と、人生の健康な時より説く生死問題を考えて居たわけであつた。ところが、積尊は生、老、病、死と仰せられる。子供故「老」は無いが、一方に母親が長々の老病で死にかかるて居られる。今まで見ても、左程にも思はないで居たわけであつたがこのたびは、「病」ということを非常に感ぜしめた。この「病」のために、平日は嬉々として愉快な性分であったのが、衰れな有様となり、今までほとんど一刻もじつとして居られなかつたのが、じつとベッドに寝てしまつて、よう起きぬ如何にも「病」の様を見ると、平日の「生」の状とはまる、で異つた様である。

自分は平生健康故、これまでさほど「病」のことは感ぜなかつたのであるが、如何にもこのたびは、それを感ぜしめた。

へは迎えとるぞとの慈悲である

と話して、それで安心して安らかな往生を遂げられた人数を知らぬ、多くの方をよく手引きして居るのである。然るに言うて、自分は死の経験をせぬ。生命を保持して生きて居るの故、そのような場合に「あの方は、あのようにして参らせて貰われたのに、遺つた自分はいつまでも世に執着が止まぬ。恥しいことである」と、こちらが手引きして往生された方の様を見て、氣恥かしき思いがあつた。又夜の寝醒めなどに、夢からさめた時など、深き穴からでも、死にそこなつて這い出して來たような心持がすることがあつて、折ふし淋しき思いをしたことがあつたが、このたび子供が無常の様を示して、淨土に迎えらるる様を見せてくれた時には、多年考えていた、死の問題が私の心でいと安い問題になつてしまつた。

「あゝ、こうやつて子供がお淨土に参らせて貰つた。自分はじめみんなが又参らせて貰うのである。今まで大ごとのように思うて居たが、ああこうやつてお慈悲に迎えられて、参らせて貰うとしてみると、左程むつかしいことでもないわい」

と、親の時は、親の参らせて貰われるのを、あとより見送つて、あだかも

極楽の部屋の戸の開かれたのをかい、ま見たようの思ひであつたが、このたびは、半身が往生させられてしまつたよう、子供に手を引かれて、送つて行つて、友人が遺骸を見てさえ涙ぐむで居られる。それについて行つてゐる感じである。多くはこういう時には、別れたという感じの方が強いのが当然であるに、別れたというよりも、一緒に送つて行つて、所謂の愛別離苦とは一寸異つた心持である。実は今朝程も友人の親の遺骸を送つて行つて、世尊が遺骸を見てさえ涙ぐむで居られる。それについて行つてゐる感じである。程の心が起る程に、甚だもつて私の心では淨土が近いことになつてゐるのである。讃岐の庄松同行が、極楽の隣り座敷に寝ていると云つた話をきくが、如何にも『觀經』に、

世尊、韋提希に告げたまわく、汝今知るや否や。阿弥陀仏ここを去ること遠からず。

この仕方のなきを哀れみお見捨てなきお慈悲を頂ければ、極楽はすぐわが隣り境界、遠いことではないと思わして貰うのである。

九 生死即涅槃

これにつき思ひは、今まで親鸞聖人の讃文、又は、聖教のお示しに、何うも分かりにくいい処があつた。それは真宗は御承知の如く、未来と現在をなる。と長々思ひて居つたのであつたが、処が矢張りこれはこのたびのことと知らせて貰うたは、この世はかく當てにならず、してみようがないが、このしてみようなきを憐みお見捨てなき御眞実を頂かせて貰う時は、その頂いた一念が最後まで通りて、いよいよ名残り惜しく思えども、娑婆の縁尽きて力無くして終る時、その者がその眞実一つで安心して、やすく法性常樂を証させて貰うのである。故に生死即涅槃は矢張り一念の信心につく。こは現にかくして見ようなきを憐み下さる御眞実を頂く時には、苦の世にありながらいとやすくと安心させて貰われること、この点むしろ一念不思議に感する程なのである。それはこの世にある限りは、何處までも肉体を持つして見ようなき人生。しかしながらその苦の世にあつて死んで行く人が、このお慈悲で皆安心して参らせて貰われる所以である。そのまま多くの人様の場合に見せて貰い、親の時は親が参りせて貰われる後姿を見送り、このたび子供の時には、子供に手を引かれて、自ら味わわしめられてみれば、如何にも「生死すなわち涅槃なり」——このたびこの点いと軽々と安らかにさせられたこと、我ながら怪しきまでに思うことである。

(続く)

は、生きり際立てる。それに聖人のお言葉では、例えは煩惱具足と信知して本願力に乗すれば

「すなわち穢身してはてて法性常樂証せしむ。

「すなわち穢身してはてて法性常樂証せしむ」は疑もなくこの世の生命を終える時である。「法性常樂証せしむ」はこの肉体を終わりて、彼の土で実現させて貰う真証の境界に違ひない。にもかかわらず聖人は「煩惱具足と信知して本願力に乗れば」とそれをすぐ頂いた處へぶつつけおいでになるの故、極言すると、この世に居ながら真如法性を証することになるので無いかと思われる程にまでその處の移り具合があるのである。また例えは

往相の廻向ととくことは 弥陀の方便ときいたり

悲願の信行えしむれば 生死すなわち涅槃なり。

これなども広大な信行を得させて貰えば、得た時がすぐ生死即涅槃たとの意味にまで仰言つて居る。けれども淨土真宗の様より言う時は、現在に於いてさとるとはどうしてもならぬ。ところがどうもそここのところが、信心はこの世で得るが、真如法性は死んでからさとるとのようにならぬ。かつきり仰言つていい。又例えば『正信偈』の

惑染の凡夫信心發しぬれば、生死即ち涅槃なりと証知せしむ。

どうもこれなども一念の立所に、直ぐ証知するが如くにあ

眞 実 の ち か ら

○ソクラテスは毒杯を手にして

「自分の肉体を殺害し得ても、真理を滅することは出来ない！」

と弟子に告げている。

○ガンディ翁は

「サチイヤ、グラハー」

「眞理を把持せよ！」と印度の大衆に叫び、武器も、財産も、学問もなくとも、眞理のたのもしさ、きびしさを確信して民族独立の道をひらいた。

○法然聖人は、晩年流連の日

「たとえ死罪に処せられようとも、念佛の一義とどむべからず。法こそ人をさまにこそすれ、人法をさまにべからず」と、語られている。

○親鸞聖人の常の仰せには

「信誑ともに因となりて、同じく往生淨土の縁を成す」とある。

法藏菩薩の四十八願(一)

花田正夫

仏や菩薩は夫々に本願を持つておられますから、その本願を聞きその思召しを頂くことが大切であります。大無量寿経を拝読申すとき、釈尊が大きなよろこびのお姿の中に、法藏菩薩の本願を四十八通りにお述べ下さっていますので、その一つ一つを先ず頂きましょう。

一、設い我れ、仏を得たらんに、國に地獄、餓鬼、畜生あらば正覺を取らじ。

二、説い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、いのち終りて後、また三惡道に更えらば正覺を取らじ。

この二願は、無三惡趣の願、不更惡趣の願と呼ばれます。

さて三惡道無からんとか、再び惡道にかえらないようにとお誓い下さる、その思召しのおこりを仰ぎますとき、私

共が朝から晩まで、三毒の煩惱、貪欲・瞋恚・愚痴に終始して、三惡道の業因をつくり、そこから足を洗うことの出来ないことを、かねて見抜かれて、その救いを誓われたの

であります。観無量寿經に、我子阿闍世のために父君ビンバシヤラ王が獄死し、自分も宮殿深く幽閉された韋提希夫人が、靈山上の釈尊に救いを求めた時、「この濁惡の處には地獄餓鬼畜生が盈満して不善の聚が多く、願わくば未来には惡声を聞かず惡人を見まい」と申して、五体を地に投げて哀みを求め懺悔しております。すると釈尊は「汝今知るや否や、阿弥陀仏ここを去ること遠からず」と教えられて、本願の真実を現わされました。

四十八願の初めにあたつてこの二願がありますことは、愚凡夫をさきに救い遂げずばとの思召しであります。煩惱具足の私共は、愚痴の女、韋提希を先達として、深い思召しにふれるのであります。

三、設い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、悉く眞金色ならば、正覺を取らじ。

四、設い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、形式同

去・現在・未來の宿るもの、その根源のことであります。

さてこの願の光に照らされて私共の足下を省みます時、人類三千年の歴史に白色、黒色、黃色人種、と色彩の差によつて、そこへだてと争いが繰り返され血を流す苛酷さがくりひろげられております。また日々の生活の中に、美しいとか醜いとか、一寸した顔や形の差で、ほこりさげすみひがみねたむことの如何に限りのないことか？

以上色と形で代表されましたが、更に財産の有無、地位の高下、先祖の如何、等々によつておこる苦悩をあげると数限りのないことであります。そうした苦を抜き、眞の樂しみを与えるとて、白黒黄のくらべもののない黃金色を誓われ、又美をほこった者もその浅間しさを愧し、醜にひがむ心が洗いおとされて惡夢と消える、美醜をとびこえた淨らかな世界を誓われたのであります。

五、設い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、宿命を識らず、下、百千億那由他（考えることの出来ないほどの数）の諸劫の事を知らざるに至らば、正覺を取らじ。

この願は宿命通の願と呼ばれます。さて宿という字は、過去のことであります。それは單なる過去ではなくて、過去

であります。觀無量寿經に、我子阿闍世のために父君ビンバシヤラ王が獄死し、自分も宮殿深く幽閉された韋提希夫人が、靈山上の釈尊に救いを求めた時、「この濁惡の處には地獄餓鬼畜生が盈満して不善の聚が多く、願わくば未来には惡声を聞かず惡人を見まい」と申して、五体を地に投げて哀みを求め懺悔しております。すると釈尊は「汝今知るや否や、阿弥陀仏ここを去ること遠からず」と教えられて、本願の真実を現わされました。

四十八願の初めにあたつてこの二願がありますことは、愚凡夫をさきに救い遂げずばとの思召しであります。煩惱具足の私共は、愚痴の女、韋提希を先達として、深い思召しにふれるのであります。

三、設い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、悉く眞金色ならば、正覺を取らじ。

四、設い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、形式同

去・現在・未來の宿るもの、その根源のことであります。

さてこの願の光に照らされて私共の現実の姿をかえりみます時、或時は、現在、さえよければ、過去も未來もどうでもよいとデカタンの生活に走り、或時は、未來の美しい夢にばかり浮かれて、足下を忘れてつましく、或時は、ことに老境に入れれば過去のことにもがき、現在も未來も見えぬ生活にとどまつて枯死する。こうした私共の行き詰りを悲憐され、その根源を知る通力を与え、それをこえさせてやりたいとのお誓いであります。これあつて遠い宿縁も、仏恩の深遠さも知らされるのであります。

六、設い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、天眼（自在に一切を見る通力）を得ず、下、百千億那由他

の諸の國を見ざるに至らば、正覺を取らじ。

この願を天眼通の願と呼ばれます。私共は皆肉眼を持っておりますが、煩惱に曇らされて物をありのまゝに正しく見ることが出来ません。ものの極く表面ばかりを見る浅薄な有様を憐まれて一切の人々の生死の苦を見透して大悲を行ふことの出来る眼を与えようとの誓いであります。これ無眼人の私共に智慧の目を与えるとの大悲であります。

七、設い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、天耳

を得ず、下、百千億那由他の諸仏の所説を聞きて、悉く受持（受けたもち忘れぬこと）せざるに至らば、正覚を取らじ。

この願は天耳通の願であります。この願をおこされます菩薩の御目にうつる私共の姿は、私共の耳はあつても常に難音に障えられて、自分の気に入れば成る程と受け、すこし心に反するとそんなことはねかえして下さい。私も儒教で申せは耳順の年、六十をすぎましたが、何時も／＼耳逆うことばかりで、年甲斐のなさを知らされますにつけ、一切の人々の言葉や思想を成る程／＼と受け取れるよう耳を与えると大悲の思召しが身にしむのであります。

無耳人の私共への切なる悲願を知らされます。

八、設い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、他心を見るの智を得ず、下、百千億那由他の諸仏の國の中の衆生の心念を知らざるに至らば、正覚を取らじ。この願は他心知通の願であります。この願をおこされます菩薩の御目にうつる私共の生活は、親子、兄弟、夫婦、友人と共同生活をしながらも、互に相手の心が理解出来ず、唯自己中心の振舞に終始して不平不満の生活を続けておりそのしてみようのなさを憐愍されての願であります。一切の菩薩は同事の行を尊ばれます、即ち事を同じくする、病

十、設い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、若し想念を起して身を貪計（貪愛していろ／＼はからうこと）せば、正覚を取らじ。
この願は漏尽通の願であります。漏とは煩惱のことで、自分の考え方や自分の身に執着している私共に、その煩惱の繋縛から解放して、自由の身とさせたいとの願であります。トルストイは「自分は真理にかなっている、相手は虚偽である」という言葉ほど残酷な言葉はまたとない」と警告しておりますが、自分の考えに固着した独善の害が知らされます。またわが身に執着して他をかえりみない我利我利亡者の毒は、家を亡ぼし、国を倒すことあります。然もそれが煩惱具足の我身の姿と知らされます時、この願の重大さが身にしみるのであります。

十一、設い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、定聚（正しく佛となることに定まっている位）に住し、必ず滅度（生死の苦を滅し、煩惱の流をわたる仏のさ

とり）に至らずんば、正覚を取らじ。
この願は必至滅度の願、証大涅槃の願、往相詛果の願とも呼ばれ、親鸞聖人が大切な願として挙げて居られます。仏心のまことを聞きひらいた者は、現身のままで、正し

人は病人になりきり、老人には老人の身になりきって行動をするのであります。私共煩惱の奴隸の身にはそれは高嶺の月で、一角相手のことを考えた積りでも、独善の域を出られません。そうしたことにつけても、他力の悲願の深重さを仰ぐことであります。

九、設い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、神足を得ずして、一念の頃において、下、百千億那由他の諸仏の國を超過すること能わざるに至らば、正覚を取らじ。この願は神足通の願であります。この願の光に照らされます時、私共がまれに立派なことを考へてもその実行力の無い、足無しの身を知らされます。聖者達は皆、知行合一とか不言実行と教えられます。孔子聖人が顔回を讃えて「回や道の至れる人か、怒りを移さず、過ちを再びせず」とあります。職場での怒りを家庭に持ちこんだり過ちも一度三度と繰り返すのが悪いとは千も百も承知しながら実行が出来ないのであります。大空に飛びあがりたい願いを持ちながら、その心の翼に身の翼がそわないのです。大空に飛びあがりたい願いを持ちながら、その心の翼に身の翼がそわないのです。論語読みの論語知らずとさげすまる外はありません。かのように地を何時でも匂いすり廻る外ない身への悲願が、この不思議な足を与えようとの願であります。

く仏と成ることに定まつた位に往し、やがて肉身を滅する時、生死の苦を減して無上のさとりを必ず得しめるであろう、若しそうでなければ仏とはならない、とのお誓いであります。譬えば、刑務所の囚人が、父母の眞意に気付いて懺悔し、身は縛られながらも心は温い親の膝下に帰つてゐる状態であります。やがて刑期が満ちて釈放されるや否や直ちに親の家に帰る有様が、命終と共に淨土に生れて、仏と同じさとりを必ず得しめられると同様であります。

或は片輪の子が、世間からさげすみとそしりを受けながらも、母親の慈愛に温められ、護られているのが信の旅姿であります。やがてその旅を終えて淨土に帰える時、今度は五体健全な美しい仏の身体とさせて頂くよろこびにもたとえられる、有難い悲願であります。

十二、設い我れ、仏を得たらんに、光明よく限量ありて下、百千億那由他の諸仏の國を照さざるに至らば、正覚を取らじ。
この願は光明無量の願と呼ばれます。この願によつて十二の光が放たれ、十方世界を照らして念佛の衆生をおさめとて下さるのであります。しかも私共の罪業の深さ剛さに障えられぬようにしたいとの願であります。

さて光明とは知慧のことで、法藏菩薩が限りない智慧を

もつて、老少、善惡のへだてなく一切の衆生を理解し尽くして慈悲の心におさめとらずばやまじとの悲願であります。

私共は心がせまく、理解出来ない場合が多く、そこに疑心から暗鬼をつくって、血みどろの争いを続けております。つけて、無限の智慧をもつて全理解者とならんとのお誓いは、まことに頗もし限ります。

自分の価値以下に見られる時私共は反抗し、価値以上に買いかぶられると偽善におち易いのですが、唯々、全理解者のふところにのみやすらぎ得るであります。

十三、設い我れ、仏を得たらんに、寿命よく限量ありて下、百千億那由他劫に至らば、正覺をとらじ。

この願は寿命無量の願であります。たとえ光明無量にましましても寿命に限りがあります。末代の私共にはその光益を蒙ることが出来ません。ここに慈悲長遠を願わされて、寿命無量の願を誓われたのであります。

法然上人の和語灯録に「總じて光明無量の願は横に一切衆生を広く攝取し、寿命無量は堅に十方世界を久しく利益せんがためなり」とたたえられ、親鸞聖人は和讃に「光明寿命の誓願を、大悲の本としたまえり」とあります。どこまでも、いつまでも、お見捨てのない御眞実心をここに仰ぐのであります。

十五、設い我れ、仏を得たらんに、國の中の人天、寿命によく限量なからん。その本願により修短(ながし短し)自在ならんをば除く。若し爾らずんば、正覺を取らじ。この願は眷屬長寿の願と呼ばれます。淨土に生れた者は仏のよう無量寿を得させたい、但し衆生を救うために淨土をあとにしたいと願う者には、その願いのままにしたい、との誓いであります。

私共は短い人生をしながら何時までも生きられるように思っておりますが、まことに「人生短し」であります。徒然草にも「墓石の多くは若き人」であります。墓地に参つて沢山の墓石を拝みますが、六十二才の私より若い人々が殆んどであります。

又、六十二年をかえりますと、過ぎ去ったあとは一夜の夢であります。蓮如上人も、「或は花鳥風月の遊にもまじわりつらん、また歡樂苦痛の悲喜にも遇いはんべりつらんなれども、今にそれと思ひ出すこととは一つもなし」と如夢如幻の人生を嘆じていられます。

この短い人生の故に、或は親に別れ、子にさき立たれ、夫に死なれ、妻を失うという、愛別離苦の涙が絶えることがありません。いたるところに愁歎の声のみちる世の故に淨土の人々に長寿を誓われたのであります。私が母を失い兄二人を亡くしました時「愛別の悲しみ深しふかれどわ

十四、設い我れ、仏を得たらんに、國中の声聞(仏の教の声をきいてさとりを開く人)よく計量ありて、下、三千世界の声聞、縁覚(縁によつて独りでさとりを開く人)百千劫において悉く共に計校(はかり考え)して其数を知るに至らば、正覺を取らじ。

この願は声聞無数の願と呼ばれます。淨土には仏や菩薩ばかりであります。そのもの名によつて仮りに声聞と呼ばれたのであります。

さて淨土に無数の声聞を誓われます所以は、私共の現在の生活が、独生独死、獨去獨來、三界孤独を憐まれるがためであります。私共は沢山の人々と共に生活をしております。すけれども、顔かたちが異なるように心は別々であります。しかも無常の風の前に一人々々が散り／＼ばらくに別れねばなりません。この三界に家なく、孤独の身と知らされますにつけ、この願の悲心にうたれるのであります。

法然上人は「念佛の草庵せましといえども、恒沙の聖衆雲の如くに来り集る」と申され、親鸞聖人は「一人居てよろこばば二人と思うべし、二人居てよろこばば三人と思うべし、その一人は親鸞なり」とも述べられました。念佛の声のするところ、そこに淨土の聖衆に護られて、賑やかな淨土の旅もひらけるのであります。

十六、設い我れ、仏を得たらんに、國中のの人天、
至不善の名ありと聞かば、正覺を取らじ。

この願を無諸不善の願とも離譣嫌名の願とも云われます。淨土には不善の者はもとよりのこと不善の名も聞こえないのであります私共の姿は悪口雜言穢語罵声等の如何に多いことか。私共が口角泡をとばし眼をいからして語り合う時、大抵は好きとかきらいとか、そしりやいかりであります。これを悲憐されてこの願が建立されたのであります。

以上十六願は、拔苦与樂の願と呼ばれてます。その一つ一つに限りない大悲のほとばしりを知られ、聖人の常の仰せ「弥陀の五却思惟の願をよく／＼案すればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」の一句がいよいよ仰がれますことです。

但し、本願は広く深いもので、私共はその僅かに一分を味わさせて頂くばかりであります。これを機縁として時にあい縁にふれていよ／＼深重の願心を頂いて淨土の旅を続けさせて頂きましょう。

一 道 会 記

(三)

榎 原 德 草

暫く休憩して中井玄英先生のお話は次のようでした。

今日はルーテルの宗教改革の記念の日で東京の神学校の先生の話をラジオで聞きました。それによると、ルーテルには三つの柱がある、信仰とバイブルと聖職者と一般信者と同列である、奇蹟を重要視しない、これが宗教改革の柱と云います。ルーテルは一五一七年の今月今日にルッペンドルフ教会に九十五ヶ条の意見書を公示しました、と。

この頃「慈光」で福島先生が「ルーテルと親鸞」をお書きになつていて、再び今日それを読みかえしました。それは政治と宗教というところです。それによると、宗教改革でドイツは二十年戦争三十年戦争と民衆は非常に苦しんでいる。それにくらべ親鸞聖人には新しい念佛信仰のために戦争は起つていないことを指摘しておられます。

最近我国では創価学会は政権を取ろうとして党を結成しています。ここですでに政治の上で争いが起つていますが

親鸞聖人はその時の政治権力によつて所謂承元の法難にあわれ迫害されるが、聖人はそれを避けられて越後に移られて「これまた師教の恩致なり」と念佛を喜ばれました。またそこで法の弘通によつてその教主と崇められるようになると又それを避けて関東に逃れられ、晩年京都へお帰りになったのもそうした力の座から逃れられるためであります。世の中の権勢、権力といふものを常にさけられて、しかもその内にきざす名利、人情を念佛大悲の光耀のうちに知らしめられ給うて、いよ／＼本願を渴仰していらっしゃる。しかも「朝家の御ため、國のため」の心が、念佛の中から湧き出しておられます。これが今日の我々民衆の中に生きて流れています。

今日小供がかけたラジオのルーテル・アリーによつて、福島先生の「政治と宗教」を再読し、引いて現在の創価学会の動きを見るにつけ感慨を持ちましたので、それの一端を申します。つまらぬことを述べまして……。

更に井上善右衛門先生のお話下さった大略は次の様であります。この淨住寺さんの近くに白井先生がお住居を定めておられますので、私度々お邪魔しておりますが、昨年からこちらに名号碑が建立されましたので、白井先生のお宅に伺い、それから名号碑にお参りさせて頂き、また学友を案内して参詣することになつております。

有難い碑を建てて下さって、今日も名号碑が雨にぬれてヒスイのような輝きを放つておりました。裏に「一念正直」表の先生になる「南無阿弥陀仏」の御名号、表に裏に往き来して、有難い日だと感慨にふけりながらここへ登つて参つたのであります。

白井先生が十月の「自照」誌に「はからずも日本に生れこの御教に会い得て……」と仰言つておられるのですが、「オネガイダカラスグキテオクレヨ」の御言葉に接し得ることは、ほんとに日本という国にはからずも生れ得させて頂いた、全くはからずもあります。私が先生にお会いしたのもはからずであり、それには先ず日本に生れ出でなければこの白井先生にもこのお言葉にも会えない。

ゲーテのあの有名な著作「ファウスト」、ゲーテはカントのような嚴肅ひとすじのお方ではなかつたようでありますが、「ファウスト」の中に、これがキリスト教を第一とした心かと思ひますが、その第一部の終りの、牢獄の場面、胸

をしめつけられ、いとしさと苦しさとに胸ふさがる思いであります。グレートヘンがファウストの誘惑にあつて眠り薬を呑まされ牢に鎖で繋がれ、身をもだえ狂わんばかりに苦しむ、所が自分の罪に対する自責の心と神の裁きに身を托する純潔は失わない。「どうぞ神様私をお裁き下さい」メフィストは「女は裁かれた」と。その時、天の神「救われた」……これが第一部のクライマックスであります。

これと涅槃經に出てくる、阿闍世が仏陀の前に出る時と大きな対比をなしていることを思うのです。グレートヘンと阿闍世と、その苦悶する姿は同じであります。グレートヘンの苦悩に対し、あそこで「審判の鐘、鳴り響く」というところであります。苦しみの所は共通しますが、仏様の月愛三昧の前に、阿闍世の「身の瘡癒ゆ」とあります。懇々と仏様は慈悲をお伝え下さるのです、そのため阿闍世の身体中にできた——苦悩のためにできた、あの瘡が治つてしまふのであります。ここがファウストと如何に大きな対比かと感じるのであります。

涅槃經の御文によれば、仏陀は阿闍世の罪に泣く姿に対して、罪人扱いもされず「大王」と呼びかけられます。そして「大王よ、あなたが罪があるならば、諸仏も罪を得るでありますよう……」と大慈悲をもつて説かれます。又

が病に遇えば、父母の心は平等に愛していないのではないけれども、然も病む子において心すなわち偏見に重きが如し大王よ如来もまたしかなり、諸の衆生に於いて平等ならざるに非ざれども、然も罪ある者に於いて、心すなわち偏見に重し……」又、阿闍世は仏心のまことに慶喜して「如来は一切の為に常に慈父母となりたまえり。まさに知るべし、諸の衆生は皆これ如来の子なり。世尊の大慈悲は、衆のために苦行を修したこと、人の鬼魅にくるわざれて、狂乱の所為多きが如し」と隨喜しております。

「オネガイダカラスグキテオクレヨ」の前に、私達が出会うことを得たことは、日本に生れさせて頂いて、先生方にはからずも会い得たからであります。西洋に生れてもいろいろの先生方に出会えたでしようが、この「オネガイダカラスグキテオクレヨ」には出会えなかつたであります。

今世界の姿、即ちキリスト教の台地から生れた浮沈流転の姿、マルキシズムの十九世紀の思想の中、その精神の血潮の中に於いて一貫しておる現在の世界を思うのです。そこへ釈尊の月愛三昧の光りを世界へ放たれる時がこないと鬪争から脱け出られない。それにしても私達は、おかげ

られる、話に伺つて以上に先生がここに生きていられる。法の命からは仏様の生きていられた二千年前も、僅かな時間、距離もわずか、むしろ法に生きれば同じだと思ひます。だから釈尊の生命は現に生きている、それを私の上に頂いていかねばならない、私の上にかかる、矢張り私は恵まれておりますと想ひます。

もう一つのことは、私は商売をしていますが、仏法の命というものが、仏法は力があるかと思うのですが、この会に参つて成程と思わされたことであります。先程の白井先生の亡くなつた人々のお話を思い、法の命が脈々と今現に働いていると感じるのであります。

次に岡山から御兄弟揃つてはじめてお参会の西本清人さんに御法味をお願いしました。

私は岡山に居りながらどうした因縁か池山先生には御縁がありませんでした。本日初めて一道会に弟と参会させて頂いたわけです。私は菅瀬芳英師のお育てを受けましたが、一方学生時代から近角先生にお導きを受けておりました。今年七十六歳になりました。

近角、菅瀬の両先生のお導きをうけておりましたが、御本願を平凡に考えておりまして、何だか飛び立つほどの喜

なき御親に出会いながら、甘え、あぐらをかいしている姿、伝統の中に流れついて反省すべき何ものかを深く感じるのであります。

白井先生から只今、菅瀬自然氏のお話を承つたのですが、「オネガイダカラスグキテオクレヨ」の姿に出会う一つであります。私自身、余りにも馴れすぎていることを憶うことであります。

よき御縁の半日を頂き有難いことと存じております。

次ぎに、今年初めて御参会の橋高さんにお願いしました

若輩の私、私は池山先生にはお目にかかるまでございません。白井先生や、その他の先生方の御縁に恵まれました。「慈悲」を拝読するうちに池山先生にあこがれるようになり、今年はじめて福山からやつて参りました。

それにつけて思ひますのは、白井先生が「自照」に、佐伯貌下と法隆寺の山内を歩いておられた時に、貌下が「あなたと一緒に釈尊の前で法を聞いた……」との意味を読ませて頂いて、実は胸に引っかかつたが、二千年前と時間的距離的ともにはなれておるのに、昨日会つたように、日々のはつきりした生活としてうかがえる、そこにハッと打つものがありました。

今日この席で感じることは、池山先生が現に生きて

びも無しに生きて来ました。結局何のために生きて來たのか、禅宗では夢、夢、と言ひますが、夢のように人生を過ごして参つたのであります。

所が、兄が先月八十七才で亡くなりました。死を前にした兄は、弟に歎異抄第九章を読ませて、二度、三度聞いて涙を流して喜びながら亡くなりました。

そんな大きな刺戟を受けても、一向に自分の心には、大きなかない牛が、いや象が横たわつていてビクともしません。そんなことではいけないと聞かしますが、知らん顔をしております。それがまた腹が立つて暴風馳雨とあはれる、それがまた恥ずかしいのです。何處にお慈悲があるのかと思う。有難い風をしているが、それなりに教えられるることは沢山ありますけれど……。

最近氣付きましたことは、本願なり、五劫思惟の御苦勞なり、大きな念佛の中の一分のものを頂いていたと思つていたことです。ところが、兄の死にあり、恰も木の葉が落ちるように兄は死にましたが、私は死を痛切に考えさせられました。そこに如來の本願は私一人の本願であつたと痛切に教えられました。「弥陀五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとえに親鸞一人たがめなりけり……」有難くもこれを聞かせて頂きました。今日は皆様方から色々と有難いことを聞かせて頂き、お礼を申上げます。

終りに大阪から来られた八木さんは、

御縁があつて、昨日は親鸞会追悼会にあり、更に引きとめられて一泊させて頂き、昨夜は松本先生や榎原先生に有難い御法味を頂き、今日は一道会に会わせて頂き、こんなありがたいことはありません、と悦びの挨拶を述べられたのでありました。

丁度五時十五分前で、一応これで閉会して夕食をし、それから座談会に移つて、くつろいだ会になるようになると願つておりました。

その食事の準備の前に、私は、かつて支那事変と云つていたあの太平洋戦争の緒戦、昭和十二年九月の第二回目の大動員で出征し、あの上海の大激戦に参加していた時、戦線の、それこそ弾丸の降る中へ内地からの手紙が届きました。その中に親鸞会から、池山先生を中心にして書いてある寄せ書きがとどきました。それを弾丸雨飛の下で読んだときのお念佛の感激を話しながら、現に珍重に保存してあるその寄せ書きを、皆さんに御披露しました。真中に池山

先生の筆で二行に
必無死難（かならず死の難なけん）

吾能護汝（われ能く汝を護らん）

この先生の特徴のある、聖人の筆蹟を謹慕して模し尽して御自身の書風になり切つた、あの先生の墨痕鮮やかな、この二河蟹の金句を、弾丸の下で拜誦したときの感激は、今もなおここに生々として活きております。

「この先生筆の、阿弥陀仏の『必ず死の難無けん、吾能く汝を護らん』の言葉を戦場の弾丸の下で、薬条五六本散り敷いた地の上に匐い伏し、飛弾を避けて読んだ時の感激をどうして言い表わせましよう。ようし、日本のために死のう、こういって護つて下さる阿弥陀仏が居られ、先生がおられる。弾丸がどうしたんだと勇む心に念佛を称えたことでした」

そんな感激を話しながら皆様に高く掲げて御覧頂いたのでした。この寄せ書きが皆さん的手から手に廻りましたが私の大事な／＼、謂はば宝物です。先生が私に「死ぬんでないぞ、どうか、生きて帰つておくれ」と、ジット、少しあの暗い顔になつて見つめていて下さるお姿が、今でもこの寄せ書きから浮かんで参ります。

食事中はあちこちで話がはずみました。西本清人さんは「念佛申すと執着が和らげられるのか長生きしますな」など云つておられる。名古屋の西川天童さんに「最近正法眼藏隨聞記の新訳が出版されましたがお読みでしたか」と私

がおききすると「まだ知りません」とのこと。宮地先生は印度仏跡参拝の折の話ををしていられる。私は先生からお土産に頂いた、ニレンゼン河の砂を池山先生の御影前に供えてあるのを皆様に紹介。先生のお写真の前には、も一つ菩提樹の一葉が供えてある、これも法友の印度仏跡からの頂きものである。

白井先生はよくかみ、ゆっくりお話をされるのでお食事は仲々進行しなかつたが、その間の先生のお話の大要を記しますよう。

した。「世界は一つ」という標語である。この心が出て欲しいと思う。

天照大神は女帝であらせられて、機を織つたりなどして神様のお心を和らげられる。聖德太子はそれより二世紀程して出現され、あの古事記、日本書紀にこの「和の心」で伝承をまとめられたと思われる。今度の大坂の世界博覽会の標語にもハーモニー（調和）がある。これは「和」の心が出ている。……。

白井先生は右のようなお話を食事をしながら静かになさつておられる。京都西山の一隅から、世界平和の願いを宣言していられる。聖人が辺鄙の群崩の中に仏法ひろまれ國家安隱なれと念ぜられ、且つ同行達に語られたことを憶うことであった。

年に一度の私共の秋の報恩講とも申すべき一道会が、如來のおぼしめす不可思議の本誓願によつて、光炎たちのぼる広大会として終りました。念佛一つで、身柄一杯なにもすぎ間のない慈悲ばかりの御法縁に遭わせて頂けましたことは、ほんとうに有難い御縁がありました。当日会合の皆様、誌友の方々有難うございます。（終）

ベトナムの戦争での米国の主張も、自分が正しいで一貫している。中共の毛沢東も儒教などのように人々に同するようになつてよい筈だが、われは正しい汝は誤つておる、と云つてはいる。日本の国会の有様も然りである。

去年のオリンピックの標語募集に一中学生のものが当選

弘誓の強縁（錯覚と念仏）

松村繁雄

幸に人間に生れても、お念仏にあうことが出来なかつたなら、たとえ百年の長寿を得ようと、それは醉生夢死で、再びはてしない闇路へ帰らねばなりません。幸に仏縁ありがたくお念仏にあり、久遠の光明界裡の生活をさせて頂けますことは謝しつくせないことがあります。

これひとえに「弘誓の強縁、遠き宿縁」によるのであります。が、私はどうかといふと、理屈の上では、「ひとえに強縁による」と辨えて、とかく「われ賢くて仏に逢い、わが利巧さで念仏」という錯覚に陥るのであります。これはまことに恐ろしい御恩知らずであつて、此處にも私のどうにもしてみようのない煩惱具足の浅間しい姿が現われるのであります。

一体、私、という奴は、何から何まで悉く間違いであります。悉く錯覚であつて、たとえば、この眼について考えて見ても、この眼で物を見て、見た、見えた、と思いますが、よくよく考えてみれば、この眼が見たのではなく、光があつ

ところがここにまことに不思議なことがあります。その深い迷いの根元を打ち破つて、私の迷いの姿を見せて下さつて「迷いよ」と教えて下さる光がありました。これは不思議な力であります。たとえば猫は鼠を捕るけれど、自分は猫であるという自覺は何時までも出来ませんのに、その猫が、猫であると気がついたとしたら、これは不思議の中の不思議であります。この不思議な現象が、私の上に現われて、おのれの迷いの姿を氣付かせて下され、その迷いの中からお念仏がこぼれ出るのであります。これは一体どういうことでありますか。

氣付いて見れば、私は迷いから迷いに落ち、錯覚から錯覚を続ける外ない狂人であります。無智であつて無智としらずに、それでいて智慧があると思いつかっているこの姿は、まさしく狂人であります。その妄念で四方八方に当たり散らすのですから事毎に混乱して苦惱するのは当然であります。しかも私の行動が他人を迷わせ周囲を傷ける結果となつて、知らず識らずに恐ろしい悪業を重ねるのであります。文字通りに「悪性更に止め難く、心は蛇蝎(だいけつ)のごとくなつて、召されて憐れんで下され、何とかして蛇でない身にさせてやりたいとお誓い下さるのが、み仏のやる瀬のない悲心であります。私はこの悲心にほだされておのれの蛇に気

付かされるのであります。しかもまことに不思議にもこの蛇の全体を仏の慈心に抱かれております。

「驚くも愚かなりけりわが影の黒きは月の光にてこそ」
私は黒い影の見えるのは、そのまんま月の光の力でありますように、今この蛇の身が蛇の身と氣付かせられるのは全くみ仏のやる瀬ない悲心の力であります。

さてここに又不思議な現象が起ります。私は今迄此地上は淋しい暗い所とばかり思つておりましたが、それも錯覚であつて、此地上は仏の光の充ちた明るい所、淨土への花道であります。私は風雨を喫らい晴天を欣び、健康と順調を幸福とうそぶき、老病死を嘆き悲しみますが、それもまた錯覚で、本当に恐ろしいのは、心の中を吹きまくる煩惱の嵐でありますのに、私は愚に（蛇であり狂人の故）してそれを恐れないであります。しかもその煩惱の嵐は昼夜をわかつたず休むことはありません。

ところがその錯覚を矯めて、嵐からまもつて下さるもののは仏の悲心であります。それが念仏であります。仏は遠い彼方でなく、今、此處におわしまして私に念仏させて下さつて、淨土へ導いて下さいます。煩惱具足と信知させられて、本願力を頂きますと、蛇の身がそのままに悲心に抱かれ、やすらぎを得させて下さるのであります。

てその力で見せて貰つてゐるのでありますのに、それをかえりみずに、おのれの眼の力で見たようと思う。即ちこの眼は煩惱の眼であつて、欲しいもの惜しいものは見えても大切な御恩というようなことには全く無感覚であり、無関心であります。従つて相手の人の顔は見えて、自分の顔はさっぱり見えない、まことに不完全でありますのにその不完全なものを完全なものと錯覚して、その眼ですべてを判断して人生に処するのでありますから、事毎に行き詰つて混乱するのは当然であります。即ち光の御恩は知らずに、おのれの視力だけを強調し自分の顔は見ようとはせず、他人の顔をあれこれと批難し、それでいてわれかしこしと思ひあがつてゐるのが私の姿であります。

従つてその智慧で宗教を語り、念仏するとしても、その

宗教は私の煩惱で都合よくこしらえたものでしかなく、私はどうしてもその錯覚から出られないであります。私の迷いの根元はそこにあつて、逃れられません。



あ
と
が
き

が悪しからず御諒承下さい。池山先生の名

号碑を中心に、人それぐの業報を持たれ
たまま、仏慈の無窮を渴仰されることであ
ります。常に一方ならぬお世話頂きます神
原様に、あらためて御礼を申上げます。

四十八願は、大経の講話で福島先生から
ねんごろにお聴かせ頂きましたことがあり

ます。又京都の文昌堂で「四十八願講話」
として先生の単行本が出版されております

京都市下京区花屋町西洞院 永田文昌
堂、定価三五〇円 振替京都九三六番

姿が随所にほほえましい光景をくりひろげ
ております。又仏の誕生を祝う花祭りの行
事が花御堂を中心に行われ、まことに陽
光に人も豚も小鳥も嬉々としております。

○
御希望の方は御求め下さい。

私自身、唯聖人が御大切にお説き下さつ
た十一、十二、十三、十七、十八、二十二

三十三、三十五願だけに留意して、他の願を
軽く頂いておりましたが、まことに申訳け
のないことであります。

「一」の願衆生のため」と私自身のあらゆる問題を底の底ま
で知りつくされての大悲の願、その一端に

ふれて驚喜しております。もとより深く広
い本願はダイヤの玉と同じで、見る方向に

よって黄に紫に等々無数の光りを放つ
ように、その味わいは無尽であります。皆様

方もそれぐに汲めどもつきぬ法味をそこ
に信嘗して下さるように念じております。

桜花の頃もすぎて、新緑に目の洗われる
頃となりました。
あなたとおうと青葉若葉の日のひかり
(はせを)

入学、卒業、就職と若い人々の新出発の
光に人も豚も小鳥も嬉々としております。
一道会例会。但し、五月六月七月の第二
日曜を除く。

五月八日、六月十二日、七月十一日、
(第二日曜) 午后一時から、津市大谷町一
番地、彰見寺、津徳本会の主催で、歎異抄
一章、二章、九章と結文の講話をいたし
ますので名古屋の一道会は当日休講いたし
ます。

御案内

毎月第一、二、三日曜午后一時半、

一道会例会。但し、五月六月七月の第二

日曜を除く。

南区駄上町二ノ八八。市電新郊通り一丁
目下車東入ル三筋目辻左入ル。

毎月二十四日、午前、午后。

昭和区小桜町、教西寺、法話会。
市電、御器所通り下車。桜花学園東。

定価 半年 二百円(送共)
一年 四百円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八
編集・发行人 花田 正夫
電話 八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印 刷 人 本 田 政 雄
名古屋市南区駄上町二ノ八八
發 行 所 慈 光 社
振替口座名古屋一〇四七〇番